

# 入社ノ辞

芥川龍之介

青空文庫



予は過去二年間、海軍機関学校で英語を教へた。この二年間は、予にとつて、決して不快な二年間ではない。何故と云へば予は従来、公務の余暇を以て創作に従事し得る——或は創作の余暇を以て公務に従事し得る恩典に浴してゐたからである。

予の寡聞を以てしても、甲教師は超人哲学の紹介を試みたが為に、文部当局の忌諱に触れたとか聞いた。乙教師は恋愛問題の創作に耽つたが為に、陸軍当局の譴責を蒙つたさうである。それらの諸先生に比べれば、従来予が官立学校教師として小説家を兼業する事が出来たのは、確に比類稀なる御上の御待遇として、難有く感銘すべきものであらう。尤もこれは甲先生や乙先生が堂々たる本官教授だったのに反して、予は一介の嘱託教授に過ぎなかつたから、予の呼吸し得た自由の空氣の如きも、実は海軍当局が予に厚かつた結果と云ふよりも、或は単に予の存在があれどもなきが如くだつた為かも知れない。が、さう解釈する事はひとり礼を昨日の上官に失するばかりでなく、予に教師の口を世話してくれた諸先生に対しても甚だ御氣の毒の至だと思ふ。だから予は外に差支へのない限り、正に海軍当局の海の如き大度量に感泣して、あの横須賀工廠の恐る可き煤煙を肺の底まで吸ひこみながら、永久に「それは犬である」の講釈を繰返して行つてもよかつたのであ

る。

が、不幸にして二年間の経験によれば、予は教育家として、殊に未来の海軍将校を陶<sup>たうち</sup>鑄<sup>う</sup>すべき教育家として、いくら己惚<sup>うぬぼ</sup>れて見た所が、到底然るべき人物ではない。少くとも現代日本の官許教育方針を丸薬の如く服<sup>ふく</sup>膺<sup>よう</sup>出来ない点だけでも、明<sup>あきら</sup>に即刻放逐<sup>あきら</sup>さるべき不良教師である。勿論これだけの自覚があつたにしても、一家眷<sup>けんぞく</sup>属<sup>ぞく</sup>の口が乾<sup>かわ</sup>上<sup>あ</sup>る惧<sup>おそれ</sup>がある以上、予は怪しげな語学の資本を運<sup>う</sup>転<sup>てん</sup>させて、どこまでも教育家らしい店構<sup>みせかま</sup>へを張りつづける覚悟<sup>覚悟</sup>であつた。いや、たとへ米<sup>べい</sup>塩<sup>えん</sup>の資<sup>し</sup>に窮<sup>きう</sup>さないにしても、下手<sup>へた</sup>は下手なりに創作<sup>ちゆうさく</sup>で押<sup>お</sup>して行<sup>い</sup>かうと云ふ氣が出なかつたなら、予は何時までも名譽ある海軍教授の看板<sup>かんばん</sup>を謹<sup>つし</sup>んでぶら下<sup>さ</sup>げてゐたかも知れない。しかし現在の予は、既<sup>すで</sup>に過去<sup>かこ</sup>の予と違<sup>ちが</sup>つて、全精力を創作<sup>ちゆうさく</sup>に費<sup>つ</sup>さない限り人生<sup>じんせい</sup>に対しても又予自身<sup>みづかみ</sup>に対しても、済<sup>す</sup>まないやうな氣がしてゐるのである。それには単に時間の上から云つても、一週五日間、午前八時から午後三時まで機械<sup>きがい</sup>の如く学校<sup>がっこう</sup>に出頭<sup>しゅとう</sup>してゐる訣<sup>わけ</sup>に行くものではない。そこで予は遺憾<sup>ゐかん</sup>ながら、当局<sup>たうじ</sup>並びに同僚<sup>どうりょう</sup>たる文武教官<sup>ぶんぶくわん</sup>各位<sup>ごゐ</sup>の愛顧<sup>あいこ</sup>に反<sup>そむ</sup>いて、とうとう大阪<sup>おさか</sup>毎日新聞<sup>まいにちしんぶん</sup>へ入社<sup>にゅうしゃ</sup>する事<sup>こと</sup>になつた。

新聞<sup>しんぶん</sup>は予<sup>よ</sup>に人並<sup>ひとら</sup>の給料<sup>きりやう</sup>をくれる。のみならず毎日<sup>まいにち</sup>出社<sup>しゅつしゃ</sup>すべき義務<sup>こむ</sup>さへも強<sup>し</sup>ひようとはしない。これは官等<sup>くわんとう</sup>の高下<sup>かうか</sup>をも明<sup>あ</sup>かにしない予<sup>よ</sup>にとつて、白頭<sup>はくとう</sup>と共に勅任<sup>ちくにん</sup>官<sup>くわん</sup>を賜<sup>たま</sup>はるよりは

遙はるかに居心の好い位置である。この意味に於おて、予は予自身の為に心から予の入社を祝した  
 と思ふ。と同時に又我帝国海軍の為にも、予の如き不良教師が部内に跡あとを絶つた事を同  
 じく心から祝したいと思ふ。

昔の支那人は「帰らなんいざ、田園將まさに蕪ぶせんとす」とか謡うたつた。予はまだそれほど道  
 情を得た人間だとは思はない。が、昨さくの非を悔くい今の是ぜを悟さとつてゐる上から云へば、予も  
 亦同じきき歸去来きらいの人である。春風は既に予が草堂のきの簷のきを吹いた。これから予も輕けい燕えんと共  
 に、そろそろ征途のぼへ上らうと思つてゐる。

(大正八年三月)



# 青空文庫情報

底本：「筑摩全集類聚 芥川龍之介全集第四卷」筑摩書房

1971（昭和46）年6月5日初版第1刷発行

1979（昭和54）年4月10日初版第11刷発行

入力：土屋隆

校正：松永正敏

2007年6月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 入社 of 辞

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>